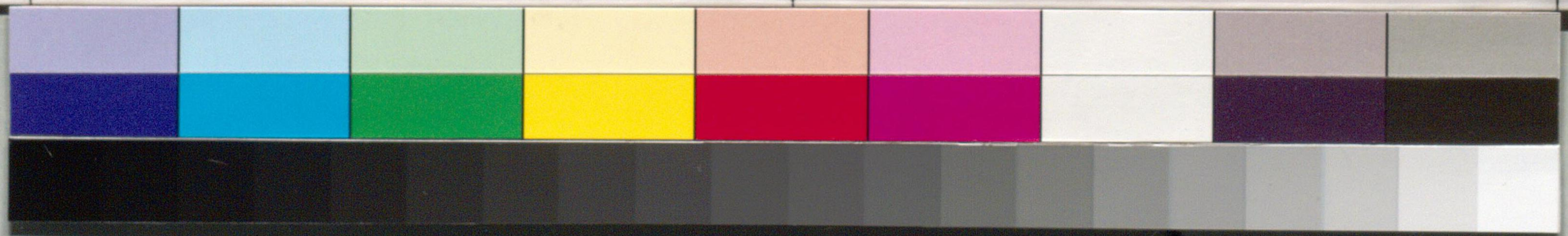
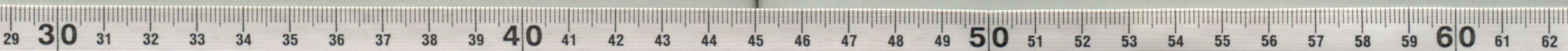


山縣有朋  
憲  
15

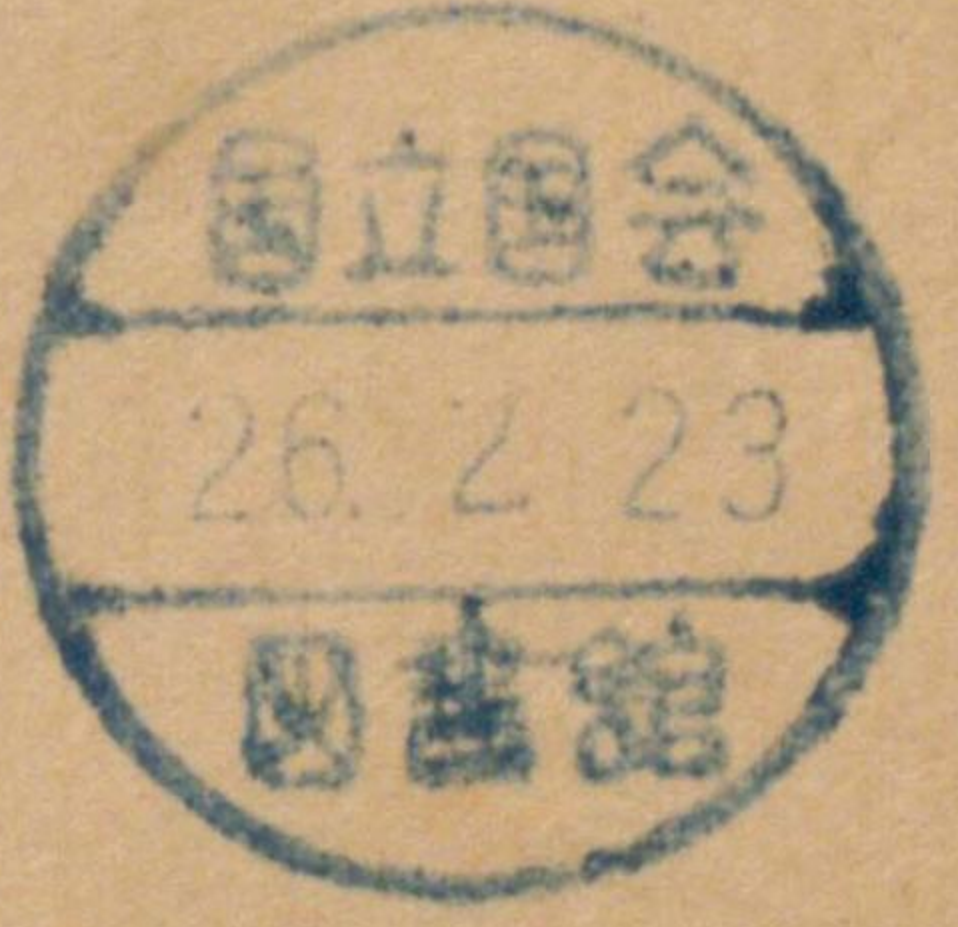
山縣有朋関係文書

文官としての山縣公(其三)  
山縣公の事ども  
子爵清浦奎吾氏談

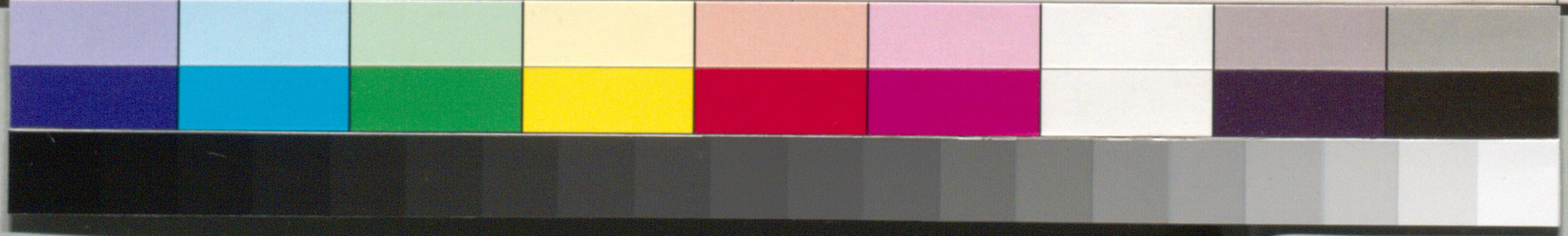




10 15 20 25 30 35 40 45 50 55 60 65 70 75 80 85 90 95  
 清浦子家討談  
 (一) (二) (三)  
 国立国会図書館蔵



225731









時代即ち松方内閣の以前に遡るが……明  
 治二十三年は初期の議会は憲法制定者た  
 りし伊藤公が内閣の首班として引受けたべ  
 きが當分であつたが時の都合上伊藤公は  
 絶対的辞退せられたので若山縣公は正  
 しく待たせられたに當らなければならぬ初日  
 に至つたためである言ふまでもなく帝國  
 議会の開会と云ふことは我邦開辟以來初

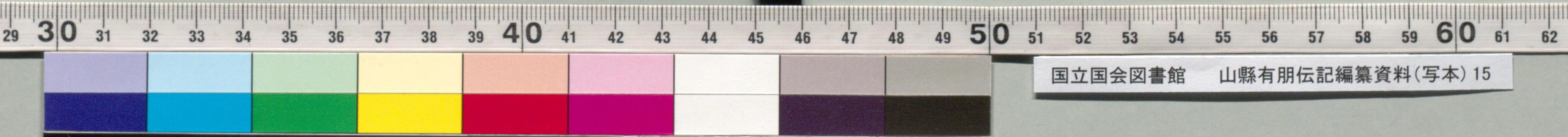
めこのことになり政府としてまた議院  
 として共に経験のないことであるから  
 之れに當る若山は即ち米先進諸國に於け  
 る議会の歴史や議事の模様なりを調査し  
 てハ夫れを美考して夫れを準備を進むる  
 外ないとの事有様であつたので随て山縣  
 公もしては此の初期の議会の當りと云ふ  
 ことは録程の難事であつた然るは公は日





自方は一々の武弁に政治は已かうぬと  
 常にちて居ら小たが夫小は實に其の時  
 に喝へら小たこととびある  
 〇能ていよく議合しなると種々なる難  
 問題が現けられた殊に藩閥政治打破と云ふ  
 聲が議院で高揚となりて政府に向  
 て攻撃の矢が放せらるると云ふ有様であ  
 ったが議案に對する論議の焦點は次年及

即ち二十四年度の歳入歳出豫算案に對し  
 てあらうた今日とこそ我邦の歳計は實に  
 十幾億を算するやうになつたわけ初期議  
 会當時は餘額が一億円足らずの僅か八千  
 何千万円と云ふ豫算に過ぎなかつたのび  
 ちるがその豫算の中から六百五十万圓を  
 削減しやうとさふのか議院……衆議院で  
 の主成であつたか之に對して政府では





何方にも初のこの議会でありたくしては  
 来の例を仿ぶのてあるから開設身々の議  
 会から政府の臨議業が議院でやつつけら  
 ぬると古きこしは素より好まぬいので頑  
 強にも闘つたし中々ゆかすしかつた尤も  
 初のは中々こゝれは中々ゆかすしかつた尤も  
 〳〵と交渉の結果か遂に六百五十万圓の  
 削減で借束が着つたのである

〵前にも古つた通り公は曰 自分は一介の  
 紳士である政治は己からぬと常に人に  
 語らぬれか実いそうてない申々の政治家  
 であつた而して公は其性格の上よりして  
 俗へこの最の周到なる用意を払て居らぬ  
 此通りは恒度軍部上に於ける公のやり口  
 と左しむあつた即ち戦に備へぬ密つてや  
 前を見後に備へてし横に目を配りつゝ





全時に其守る也

作戦を進めう水（例）えは唯一の壘か破れ  
 れば又らに水二の峯と守ると古つた洞子  
 で従の昔小早川隆景の常は古つた片に進  
 むことより小早川退くことに深甚の注意  
 を拂ふて片に古つた水か小早川の戦法  
 の古つた片に政治上に流れる駈引をも矢  
 張り此の戦法から割るて進む一方より  
 は退き際か最も大事であつたと常に私共は

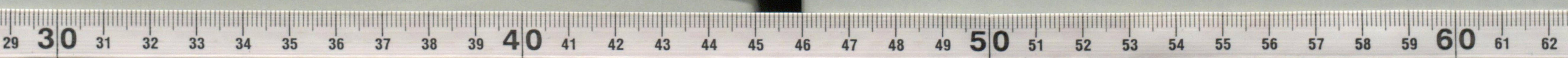
も語る水れが這は單に公か吾々を戒めり  
 れめの言葉のみではなく公へて此の片に  
 態度の上に現けれ片に  
 の片に今一つは公か人を用ひる上に就  
 ていふか例えは伊藤公はよく適材を尺  
 おして適所に之れを用ひるるか否か  
 し其一たび用かすれか最後夫れこと未  
 づたらかいでありしも願みない可笑しい事





をするやうだが伊藤公は清嘉治の通り大  
 変に女を愛しアキウもコキウでも藝妓  
 の雑妓に手を付けさか一た心飽きか半た  
 となると後ほドウならうと致人と志水た  
 ようでいおる而かもコオイ君役女はトウだ  
 世話をしやうとさして自分の関係  
 と片た女をサツサと人に譲て一向平氣で  
 おるが伊藤公の筆法は唯此に二ハは不

リてなく縁へこに斯ふてあつた見やうに  
 よりは淡泊でやしり執着心かたいと古  
 へやう………コンナことは一つの例に引た  
 のにすまなないのび清浦か古つれと書いち  
 の困るハハ………角女兵に打ると山縣  
 公は全く異つた坊者は使えら役にたつと  
 見込んで一た心用いたか最後其者の歌の  
 善い悪いとか出来ると出来ぬは明瞭でない





苟くもコレはと云ふ方一に過誤のちの限  
 り決して捨てるやうなことは一ちかつた  
 先きの先きまび又てやるとちつた風であ  
 つかから使ひ小る其人も公のためには赤  
 とび命を掛けし是すこと心持ちで事え  
 たものた  
 〇公はが人を用ふるにまだけう古ふこととあつた即ち必  
 要な場合に當つてい恨みをかたくす……と

が人を用ふるに

大事

てし云ふか平素筋り信用して居ないもの  
 ても夫々の適所に之水を用ひたものた例  
 えは陸奥伯宗茂か其一人びアノ人は赤系おの  
 廻り國事犯さておちて牢獄につちか  
 たものび現に薩州系の人とからはヒトク  
 要く尺りして位と勤め役にも立つか  
 りりルは中口油新の出来な人物であつ  
 たか公は此の陸奥伯と大變に用ひられ





ト云ふのは當時彼れい士佐の自由党と  
 は大分違へても居たのでその等の関係も  
 あつたであらうた水はけの初期の議会は  
 いり／＼の問題が紛糾しやかましくつら  
 げ際りい民軍即ち自由党と政府との間に  
 立つては陸奥伯が斡旋努力したことは決  
 してかくばい以上の諸君から考へて公は  
 世間をたも局量の狭い如何にも窮屈な人

のよりに見られるに居るけれども實際に斯

格好風で實に融通の利く人であつたこと

とかさかるとはらう

コンナエ合で初期の帝國議會は随分い

り／＼面倒な問題も事疊して居たけれども

も將來の先例にもなることだからと所謂

憲法の精神に基いて彼れあたうと交還を恨

の途を満したのび随て開設早々から議會





の解散を促さるやうなこともなく、愈も漸く  
も無難に第一期の帝國議會を切掛け、二月  
出度く開會を告ぐるに至つた。七月の  
印妙、振り、公の所謂一々の其年か政治を  
弁へない。これは到底出来な、藝宿てあつた  
と思ふ。斯くて公は第一期の議會を終る。と  
問も、打く内閣、代理大臣の平復も解か、  
所謂骸骨を乞は、小のひある。即ち、小縣公

と、して、矢張り軍人として、この名号を完  
し、其所謂退き、際か大事ひあると、ち、公平  
昔の戦法から、未だ雪隠詰りのドタン場に  
立到らざるに、先ち餘裕を將來を貽し、  
悠々乎らして、引上げた。過、一流石に立流  
は、退き、陣、振り、ひあつた。甚、まじ、  
け、小の、が、即ち、松方内閣で、其の第二期議  
會に、臨むに、當て、之、小、又、た、初、の、か、り、衝





突を覚悟して之に向て遂に議会を解散  
し而して時の内相高川子爵が従の所謂選  
葬大干渉を免つた爲めに前日に述べた二  
十五年の第三議会と成つてい内相の交迭  
か偉返さんなりゴタ／＼の末か拓方内閣  
の瓦解となり伊藤公か大命を揮して前に  
例の元老の内の閣が出現して山縣公か  
司法大臣の椅子に就かると古外順序に

なるのであ

○藩閥政治で思ふは二十三年後にも

うであつたけれども其以前回会か開か

る直は所謂藩閥政治で随てこの薩長の勢

力争ひと古外か両者の暗闘明闘共に甚れ

つたものた例之は薩の大久保と長の本

の閣か何うもシツくり行かぬので三條公

か何閣に立て調和に努めて居たと古外



ともありたれから井上文左即ち警侯と馬  
 田清隆伯か何時も喧嘩ばかりして居れ有  
 探てあつたか山縣公は薩長の先輩の向  
 にまて絶えず両者の調和に努め其志志の  
 疎通に對して骨を折られたことは非常な  
 ものであつた……伊藤公もさうして山縣公  
 と共に之れに居力されたのである而して  
 當時薩州派の元帥のとも古外先輩の歌頌株

は西御從道さんであつたまかこの西御さ  
 へも左し軍人自身であつた山縣公を見方と  
 して心から常に推服して居たのじあは  
 水は薩州派の人々か寄集つては時に長州  
 の仕打ちを批難し山縣公のこしを攻撃す  
 ることあつても可マく山縣さへの古  
 月なることとびゴワすから……山とちつて  
 西御さへか自分の力て一同を押えては何





時も新と煙のて居たもので山縣公も西郷  
さくも非常に信頼して懐かし自命の腕と  
も力ともたのんで居うた又た大山巖公  
も西郷さくと左しく山縣公に見事した薩  
州派の一人である成人は市井おの思ひ至  
て度量の大きい事には一切構はぬ性<sup>たち</sup>び何  
時も諧謔的に嘲をして居たかそのまね諧  
謔の中に得もたへぬ真理か居まんと居て

不思議に人を納得させる力を有<sup>つ</sup>て居たの  
で山縣公とは互ひに深く意志の疎通が成  
来て居た斯う古あ次で山縣公は政治上  
にもこの西郷さくと大山公の二人を第  
一として何事にも相談對手となし惚へてに  
助力を得て居たので薩長両者の融和につ  
いても公は此の二人の爲めにかかりさる  
便宜と力を得た話である其後いよく國





会の開設となり議院の内外で藩閥即ち薩  
長攻撃の<sup>に對する</sup>民論となりてやかましくなると  
会時に今まじ互に相及目し争つて居た  
薩長の両者は共に敵か外に現はれ  
のじ徳平の唯み念いか自然に少くな  
り薩長協同して共に外敵即ち民論に  
當ると古ふことになつたのは之れは當と  
の事行きひあると思ふ

〇び又び一寸前二回に亘て述へて来た  
ことの補足をしたつと古ふ先づ中央衛生  
会が山縣内相の時代に始りて出来たと  
したのは私の思ひ違ひてよく考へて居る  
と之れはモット以前に出来て居る佐野常  
長と古ふ人が会長をして居たやうにも  
はるのじ恐らく山田顯義伯の内相時代  
に出来たものと思はれる





の内部大臣時代に其下で土木の方に一番  
働いたのは古市公威博士で岐阜縣の長良  
揖斐岐阜の三川合流矣の改修工事は専ら  
けの古市男が當つた次きは筑後の筑後川  
即ち千歳川の改修には石黒五十二博士が  
あつたし左邊の淀川改修には沖野博士が  
之に當つたのである尚ほ此の時代には  
前にも述べたやうに條約の改正とか國會

開設の請願などの方々に暴動が起つたか  
今から考へると其頃の人は今日に比へて  
モトト真面目目に何事にも真剣味を帯びて居  
れようである………今し直真接行動ではあつ  
ても今日のやうな共産主義とか社会主義  
的の思想などは少しも漂つていりかた  
か………  
稱から自動車ハコの爆音ハコけれ、改ハコの





下からきて子爵邸の内前に停まられた  
 男うと程なく書生の羨望は名刺を見  
 て日水野徳太郎君か何にか至るに用か  
 ありと見えて突如とて来られたので  
 甚だ失礼にか今日はうらむに四五兩  
 日は已むを得ない人の扱きび一泊りの  
 確定で小田原に行くことにしてつか  
 ら来た七日午後三時にあちを船につれ

たるに...

# 清浦子爵評

一回

清浦子爵評  
 一  
 清浦子爵は、明治維新の功臣として、  
 国家の発展に多大の貢献をなされた。  
 その功績は、後世に語り継がれるべき  
 ものである。









帝國議會で謂はば議會政治に對する最初  
の試みであるので之は當然憲法制定者  
たりし伊藤公が引受けし時の内閣を組織  
すべきであつたのに伊藤公は何うしても  
受けなかつた其所謂時都后上は就  
ては色々周囲の事情もあつたうゝこれは素  
より伊藤公の肚の中に入つて見なければ  
わからぬものの理由もあつたであら

うか要するに伊藤公は當時樞密院議長で  
あり此際責任の地位に留て議會に留るよ  
りも寧ろ現在の職に止まり憲法の運用等  
に就て疑議の起つた際制定者として之を  
起草した趣旨に基づいて明確なる解決を  
与へることしか制定者としての責任も定む  
ずる上は於ても當然の途と考へらるゝの  
てあらと尺るのか蓋し妥協の見方であら





う斯様な経緯から山縣公は周囲の事情止  
 むを待す困難とは知りつゝも遂に自ら内  
 閣を組織して初期の議会に臨んだのであ  
 るが法制局長官には憲法制定の當時實際  
 に等と執つた井上毅子か之小に當つたの  
 ひある尤小は井上子は一方には法制局長  
 官たり他方には例の曰憲法疑解正を伊藤  
 公の名によりて公行之が解正と運用に就て兩々相俟て常時は

勿論議合開会中も山縣首相の爲めに大に  
 力を盡したものである  
 〇此の初期の議会じやかまかつたのは  
 豫算の問題じ之小は前にも述べたように  
 数次交渉の結果六百五十万円の削減と云  
 ふことに結末かつたのであるがけの明削減は  
 治平四年はの歳入歳出総算額八千何万  
 円の中で經常部に属する六千五百何万円



に對し天引一割減と古ふのびあつて軍備  
擴張費とか何とみ別に費目を限定したるも  
のびなく経常部屋俸の中から一割も天引  
に削つたものびあつる當初政府の方では議  
會のこととあるし政府の作つた豫算案に  
對し議院で之小に手をつけると古ふこと  
は將來の先例にもなり政府の威信にも係  
る古ふ當時の狀態から中々腰が強く解散

もやりかぬといけと堅い決心で一步も譲  
らぬい意向であつたが何卒にも議会同設  
句々の際にもあり解散と古ふ先例を其初  
から作ることは避けたことの考から所謂  
交譲妥招の途に出たのびあつ一方議院の  
方にも最初はまだ一割削る意向であ  
つたが彼の陸奥宗光伯卿とか土佐のやか  
や連中も説いてあげつた結果かマア



マアと六百五十万削減し折后心かつ  
 此即ち妥協成立したあがけ初期議会は  
 解散と云ふこともしつゝ此の貴族院の  
 了と三日三夜で全部の審議を完了し  
 隠算案成立し免し角も無事に開会を告げ  
 此のしむる  
 ◇初期の議合びた水しモ一ツやあつたか  
 了此のは権利問題であつた事か  
 中

々論議するものた例之は集会條例とか

新中條例とかたつたやうなものでも治安

保持の上から最も嚴重にドしと言論

を扱束し新中がともてお売禁止発行停止

から差押へしと當時随分と政府ともや

つたしのだまて政府か一方にコウ抑壓言論の扱

り壓迫もや小はやつて反對に民論か激

抗する事か自然議会の問題とつて現





けしゝとちつたエ后の中、駭かしてあつた  
當時之暴民軍の急先鋒であつたのは土佐  
の植木枝盛とか末廣重若らとて非常な勢  
で政府に向へ来たものなり即ち新約條例の  
改正とか言論折衝の事実を提えし隨后や  
か、や、く、佐野、し、て、来、た、の、と、あ、る、か、政、府、に  
於ては議會は政府の提出した案ハのみ對  
し、こ、答、え、る、と、ち、よ、う、針、び、之、に、向、ひ、免、し

角も無難に切替けたらぶら  
◇そこで此の當時に於ける權利の問題に  
關聯し今日でも勿論さうであるが當時も  
思想界は隨分と錯雜して居たものなり明治  
中維新と共に西歐の文化が俄かにトシク  
し我邦に這へて来た無論之に伴つて外  
來の思想も遠慮会釈なく這へて来る世  
人之心を稱して政權主義巴と呼び政化主





義とも稱して居たものである之等既米不  
ら這十つて来る學問の中には米國<sup>學</sup>派あり  
佛學派ありと云つた婆び各々其學ぶ所に  
依てまはさるゝ居たは先づ當時我邦  
の思想界は佛學派の權利論即ち天賦人權  
論と云ふものゝ米國派の公利論と云ふは  
ニ大學院か一世を風靡して居たものと  
よハソコで前者即ち佛學派の權利論は彼

のモンテスキューやアホラス等に依て唱  
へられしものゝ兆氏中江篤村がとかは論  
者であつた又米學派の公利論者は福沢  
諭吉あたりか其主なものゝあつた當時福  
沢の著けられたものゝ中には西洋事情  
とか日學問の勸めとか或は日智惠の  
た巻正等と云ふ隨分進んだ……ヒドイ  
のあつたが言論の抑壓甚しかつたので





當時に於て何う否のかのコンナものに  
は割合に寛大であつた斯う否次第其  
の<sup>最も</sup>甚<sup>し</sup>なるに於て共和制にても説  
及ぼす即ち政体は其宜しきに從て変革す  
べきものであつて帝王たりとも絶対のもの  
では無い存小は我皇室たりとも國家を治  
むる上に於て便利であるところあり存し  
ておいて好い殊に今後政党政法の發達す

るに伴ひて政體の軌轍と否のめか否  
は激しくなつて來た際皇室の否の政體  
に否の否と一居るの否の政體問に於ける軌  
轍の否の否を治するところにもならう否の  
否の否の否には皇室の切能も否の否の概  
に否の否を治してし否の否の否の否の否  
つた説の否の否の否の否の否の否の否の  
唱へた米字派の否の否の否の否の否の



とか中江兆吉の極端なる権利論即ち  
佛<sup>學</sup>國派の古くは二大學說の當時の我思想  
と之即して居たところも好む所も一方  
に於ては條約の改正に伴ひ我邦の所謂政  
化主義は一層激甚となり滔々として一世  
を風靡するところ有れば其風俗も又文字  
言語にもよまひ俗へて西洋風となりしは  
夜の明けぬところやうにたかふ水方であつ

た現に時の外相井上馨侯と鹿鳴館即ち  
現在の華族會館でヤレ衣装芝居たのダン  
スだやうと強くと毎晩のやうに洋装した  
夫人と手と携えてゐる中になつて踊り廻  
つて居たものだ  
◇此の極端なる政化主義即ち西洋のやうに  
に対して友誼團體とも思ふべき同粹論の  
起るべきに當るべき土佐の谷干城子





とか神鞭知常たると古の人か若頭人となり  
て教はるゝて握鞭し高橋某か其考謀とた  
つて現代主義心酔者たる彼等と対抗して  
大に同粹論の靉吹に努めたるものゝある即  
ち其説く又は明治維新を一轉期とて西  
欧の文化が我が邦に波及し、遠く未だや  
うにならざれば就ては素より我の徳水に等  
ふべし其矣も多からうかうたれば宜しく外

同に倣ふつてある言換ふれば我同粹は  
同粹とて何れも立つ、徳の所謂現  
代主義の中から之れを区別し日本の血潮  
に消化せしむる徳水の長を執り我水の短を  
補ふと古の風を我明治文化の進歩を達せ  
期することは必要である、其水も現在の  
如く頭から現代主義が下りて来るを丸呑み  
して何も尚も之れを觀望的に換換せし





くすゝの如きは不権識のよもなひに  
あると方々同弊論はたしく盛に  
存せりしか雜法の日本人なりとも  
政化主義攻撃の論文は場けりたも  
か勢い當時に於ける我邦の教育  
りに智育にのみ偏して德育の方面  
して居ることに漏及するやうに  
のむとる在りは才の混乱したる時  
に於ける

教育の  
功

我邦の思想界も一其間を誤りし  
めす竟く之れを善導しやうとの  
は彼の教育勅語は明治二十三年  
の十月に  
煥然と心れおのむる勅語の御  
知の具し我日本固有の同弊を基  
を磨くことに重きを置かれ  
後名あはは義勇公に於し天壤無窮  
を扶翼して祖先の遺風を顕揚せよ  
と日本





同身たるもの、心得を養ふべきもの  
である。この勅語を發布するに就て最も  
心を同じ力を尽すものは、室の時の内閣  
総理大臣たりし山縣公で、文政の局にあつ  
た若川顯の伯と、熟議に熟議を重ね、法制長  
官即ち憲法制定に當つた井上毅子と、こ  
の氷を起草せしめたもの、である。か  
らに、  
當時侍備としてつた、  
之田永孚先生、  
副島

伯も之氷に与つたと思ふ、  
大帝の御沙汰を仰して、練りに練つて、  
上つた。此の御沙汰、  
せらるるに至つた経緯の荒<sup>あら</sup>き、  
教育勅語の中、  
勅語の、  
陸軍に下つたことは、  
風は知るまいであらう、  
山縣公が、  
大正時代、  
功績否





市制  
施行

山縣公史實調査會用紙

は公の文治上に於ける切實を思ひて其故  
もたざるもの一つは我邦に創えて自治  
の制を施した事であつて彼の府縣制及  
市町村制の實施が即ち之水であると言  
ふまでもなく國治と自治の制と兩立し  
て國利民福を増進せしめぬと云  
ふ振會に基くものてあるが日本にも従來  
自治制に似たりやなもののか行けぬないで

はなにか而かも一とて主流に出来たも  
のがないソコで一方には憲法も實施すべ  
のじやうから其の精神に基いては自治の  
制必を施くことは能はざる處の大典たる憲  
法も完璧さす所にしてあると云ふのか即ち  
山縣公の素論であつた存は公は此處大  
臣となるや當時西歐の先進列國中尤も  
制法の完備して居た種回に於ける實施の

山縣公史實調査會用紙





現状を具さに調査すると共に之れが施行  
に因ずる準備として其道の大家と今回大  
ら聊備するところなりたのびあるが當時駐徳公  
使として伯林に居つた青木周蘇子公と  
は左御てもあり親しい間柄であつたから  
以手を経て色々の参考資料も得たり我邦  
に聊備せしとする専門の学者の人選に付  
ても青木公使から有名なグナイスト博士

に萬事相談して遂に彼のモツセーと古ふ  
学者を招くことに決定しれやうな次第で  
斯くしてモツセーは日存に着任し實地に就  
て調査研究を遂げたまは偉の成績不出來  
上つたから二十三年には之れが為のに内  
務省に自治制及調査委員会なるものを設  
け左省に於ける関係者は勿論大層有るた  
りから夫々委員を考へし更らに該成果



に就て慎重なる審査考究を経た結果茲に  
多年の懸案であった自治に關する諸法令  
の實施を足るに至つた次第である蓋し之  
等の諸法令は實に我邦に於ける自治制の  
第一歩であつて而かも山縣公其人が自ら  
進んで之に手著けたと云ふことは當  
時世人が著しく驚異の目を忍びつたと云  
ふ位進み行く時代の要求に直応たる施

設として特筆大書すべき山縣公の一切  
績にある

◇さて今度は山縣公の政黨論である世間  
には山縣公を以て徹頭徹尾政黨嫌みの  
頑冥極まる類の持主であるかの如く解す  
るものもあるやうだが事實は決して左様  
でない憲法政治の要諦を要するに政黨政  
治の完全なる奏達に俟つ外はないこと







清浦子爵談

○山縣公の事ども

子爵 清浦奎吾氏談

故 山縣公の逸事に就てその纏つた部

分は大體既に述へたと思ふが唯だ公

の傳記編纂に當つて何かの先考にも

と私の實際に及ばしめたことどもに之

と談片的に分析するものに一つも

山縣公の實調査會用紙





◇公は中京の通陸軍大将之帥の肩書  
 を有しおう小たことびもあしし殊に軍階  
 の擡閣にか演習は公か夙に最も力を  
 入小  
 二居う小た必たのび毎年行さる陸軍  
 の大演習には病氣でた限りは努めて  
 が考考<sup>加</sup>なり陪観された殆くは  
 之のたいと古てもよいと思ふ。然るば公  
 の朕年……明治何年頃であつたか例年の

二及討論の起り種々た了反對運動の行は  
 小た結果遂に貴族院に於て否決の軍命に  
 陷つたのてあるか分は此事に就ては非常  
 に遺憾をせう小其後も思ひあつるあし  
 詰り此事を古て居う小たかこの在世中に  
 は五に実現を免るに至らなかつたや中  
 ちうても宗教の園に時を色しの調査か  
 行中から居るようたか免る角宗教の由





事巧あつたこしはらの終せあしへの恨事じ  
 あつたうと男  
 の前にも所  
 道侯の薨考せり小にこころ神しは心は  
 意何かう小と哀情しお糸の岸の暮に  
 一たび先と嘆せり小て居たやうであつた  
 時私に寄せり小に手簡の中にも公はけ事  
 と際す小て其薨考を悼み可老生にとつて

は惟新以前より同友として返すくも陸  
 尾に小正とあり哀悼の至情筆紙に溢れて  
 居るとはけ事であらう蓋し公が陸軍に於  
 てとらへ其頭角を現けしに比か  
 ら部内り起けり敵回は言ふ迄もたらく薩州  
 の一派とあつて事毎に長州就中當時の山  
 縣公に對し反對の甚なりあつた其中心西  
 郷侯は公を御めかゝ見事し高気相控して





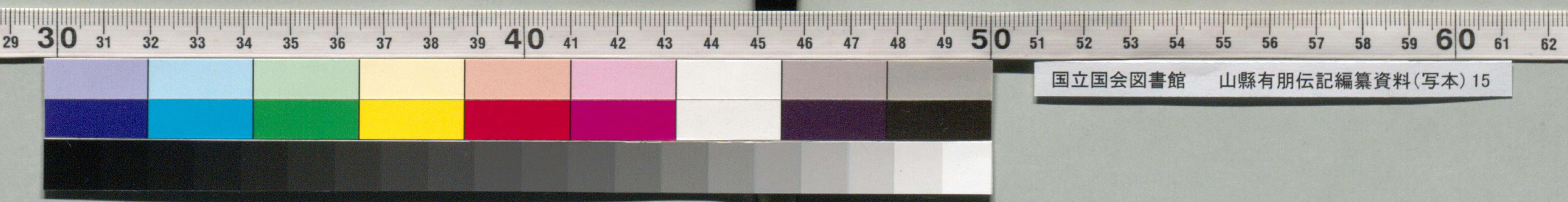
居り狼りに狼けつた所渭薩摩軍人の中に  
 在つた其牛耳を握り此連か如何に山  
 縣に反対せやうかと云ふ事か法し  
 心に委しておけ山縣サンの事か法し  
 て要くは討つ人とはたかかういふと部  
 内を押入て國家の爲めに何時も分と午を  
 握つて進みおれたるはこゝにも畢竟陸軍  
 はおりの巧く文治上は放つとも又とた相

誇對午うて西御侯を信じ相持つて共に  
 國家の大事を處理し來つたものあるか  
 ら西御侯の死は山縣公に取つては全く片  
 腕をえが西うおれたるに思ふた無理  
 になつた思ふ  
 〇それか山縣公と新中の關係ごあるか  
 世間には分を月一で徹頭徹尾新中嫌いの  
 人のやうに言ふおれけんともおれは全く皮



相の観方ひ新中政策とちあもりのは今の最  
 も心を用ひて居るもの一つであつた  
 由來今は外資硬の人で時の外務省出りの  
 やり節か午ぬるのしやし軟弱外資の十レ  
 のとどし〜女騎手あるとこじ外務省の内  
 務省あたりで何時も内輪演説と原案し  
 居る加之等の關係から新中政策には最も  
 意を用ひるやうに何時何時の如しあつた

か字内大臣とあつた田中忠告約か、彼のや  
 むと新中政策の關係し始まるのは、今に  
 志に基くものである





清浦子爵所著

山縣公之子翰

清浦奎吾子所著

山縣公史實調查會用紙

山縣公史實調查會用紙









堅	之	に	か	如	キ	リ	覺	へ	こ	の	猶	行	と	逐	つ	テ	讀	
到	レ	ん	其	論	旨	の	正	確	公	平	ナ	ル	こ	の	不	拘	遂	
之	邪	説	の	爲	の	推	倒	湮	滅	セ	う	し	こ	の	爲			
皇	室	爲	同	家	の	實	の	千	歳	の	遺	憾	大	事	已	の	去	矣
ト	憤	懣	大	息	の	不	堪	少	時	の	レ	復	之	ヲ	讀	ん	ん	
之	魏	テ	正	確	ノ	主	旨	公	平	の	論	議	自	の	史	揮	リ	
放	テ	乍	テ	清	明	の	世	の	再	遇	ん	ん	ノ	感	リ	生	レ	
乙	義	の	萬	世	の	身	ヲ	滅	セ	サ	ん	ん	古	今	の	且	義	

之	テ	遂	の	鴻	謀	邪	術	の	在	同	シ	打	破	レ	タ	ん	ん
突	の	近	来	の	快	活	譬	フ	ん	の	無	物	不	独	爲		
皇	室	又	同	家	の	洪	福	や	ハ	一	事	の	社	會	の	突	起
セ	レ	以	來	諸	兄	の	甚	慮	焦	思	突	の	想	像	の	ル	の
録	ヲ	ア	リ	然	レ	テ	遂	の	爲								
君	同	其	主	意	ヲ	貫	通	セ	う	し	こ	の	又	諸	兄	の	腦
裡	千	百	の	爽	快	果	レ	テ	何	如	哉	今	茲	の	レ	佳	報
ヲ	謝	ス	ん	ト	共	の	諸	兄	の	鞠	躬	若	力	勤	驥	ヲ	歎





ハシタニリ回家之為ニ  
ノ敬希措ク能ハス

候  
某氏桂尉之事ハ頗ル重要ニ一問歎ナルカ

故ニ便令事情不可己ニ今日ニ於テ其ノ岸

止ヲナスハ不可然猶條ニ後因リ為ニシ

且ク一事ハ互覆悟来リ推考ニ渠ハ術策ニ

陥ラサレ標周到注意ノ上青山ト談話リ遂

ニ事情ヲ悉サシメテ之ヲ輕易粗忽ニ岸勤ニ不

到標切望ニ不堪候猶老生歸京之日鄙見可

及爾陳萬一變態ノ事情ヲ惹起スルトナハ

一報ヲ炊ニ夕ニ時ニ御自重千金

早々押復

十一月十日京都南禅寺畔

無隣菴主 朋

好育







今日尚ほ存命して

關係上其事相をハツキリお祈しす

るのは他はに攘りた

書中の可青山は宿時宮内大臣

乙西ノ田中光顯伯で可欲庵

は野村清子の号である

〇

(大正十年二月十二日)

昨日ハ草菴御来光と志し多謝近情候々拜

新本懐不過之候其節御談致候様歐洲大戦

終了後ハ全世界に亘り物質上精神上非常

あり変化を来し可申而して計競争いはず

東西の天地を中心として襲来可致し

信し候又其競争は政治上経済上直接間接



種々の形式を以て野山列強東亞の天地に  
覇を争はに當りては帝國の地位に戰後に起  
るべし大颯風の衝は當るべし高樓を覺悟  
せざるべからず此の狂風怒濤に向つては  
岸固一致人心結合して回家の基礎を鞏固  
たらしめざるの外無之事に存候然も其之を  
実行するには容易の事ならず或は想あて  
此に到らば帝國の前途日夜恍惚深憂に不

堪以茅に候老兄も亦御同感と案し申候猶  
同志と共に憂國の志士を指導誘掖せらる  
將米信の帝國の光輝を茂揚せらるること  
不堪切望候所且御談存之候候補若猶御熱  
慮被下候て決定致度候老生も如御承知齡  
に既に八十を越え婆心類に到りては鄙見  
概要を披攤し呈一書信猶老兄の内氣充分  
御静養連に御全快と祈候老生の経験にて





は 封 詔 並 外 出 候 禁 物 有 之 候 唯 安 靜 庫

裏 の 外 無 之 存 候 如 例 乱 毫 高 怒 祈 上 候

早々 候 旨

二月 十二 日 古 稀 慶 乙

老 主 朋

圭 堂 清 浦 老 兄 望 下

老 人 近 来 健 忘 殊 に 甚 く 字 也 高 小 語

と 高 小 誤 字 脱 字 等 不 少 御 到 讀 可 從 下

早々

◇ 本 手 翰 に 対 す 清 浦 子 爵 の 注 明 ◇

大 正 十 年 乙 未 一 月 山 物 公 の 裁 許 せ

う 小 正 前 年 乙 未 一 月 の 平 紙 心 の

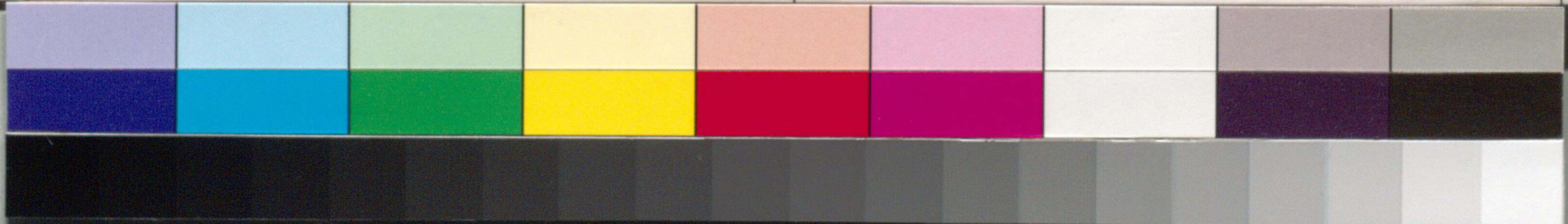
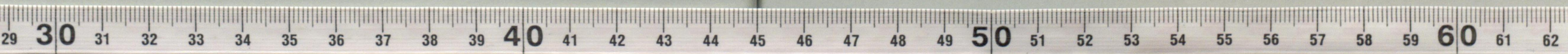
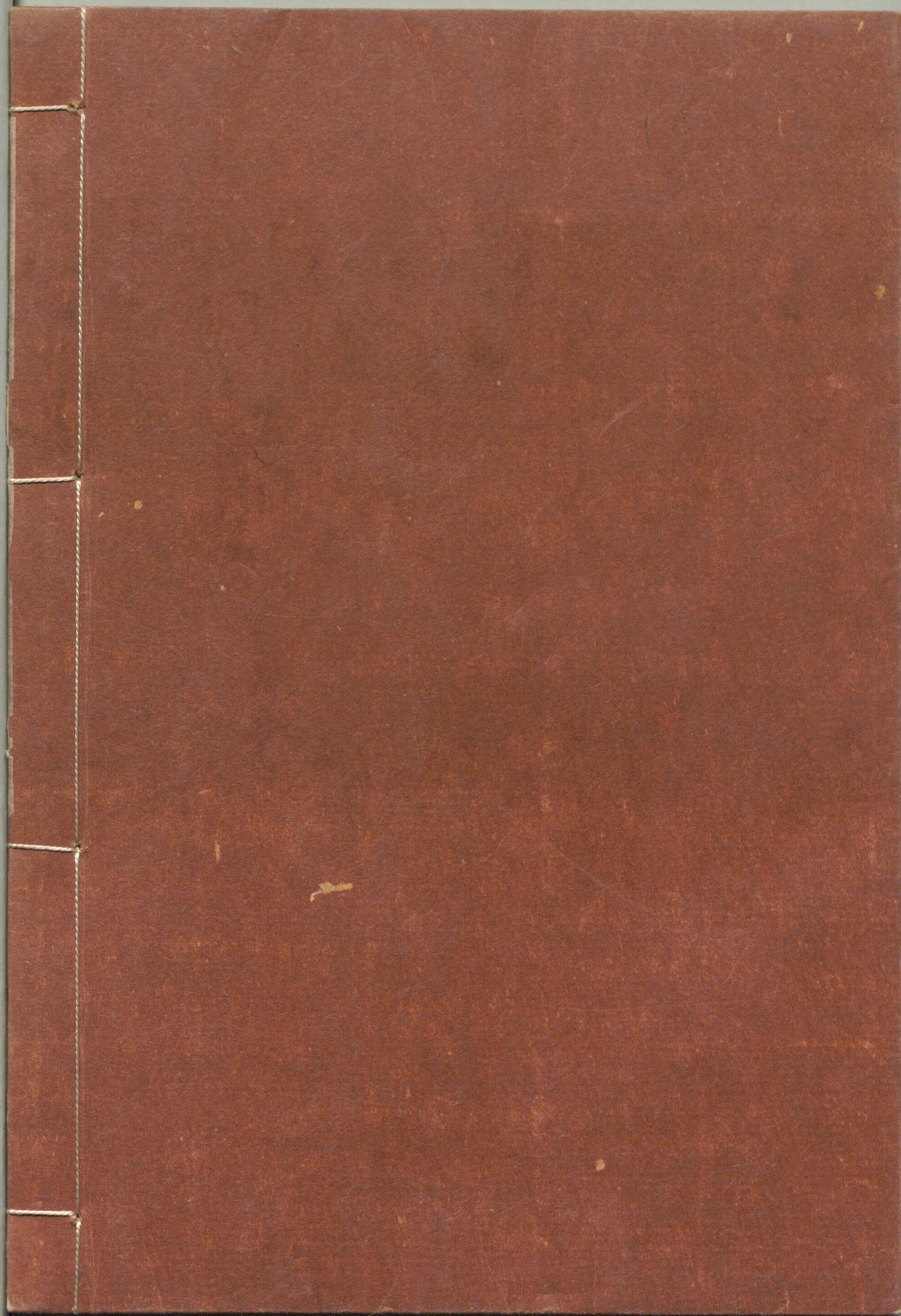
所 謂 日 齡 既 に 八 十 を 越 え 出 而 一 乙



に	に	且	銀	も	認	高	可
及	邊	つ	屑	の	め	小	建
み	り	回	袋	た	う	口	忘
す	て	家	も	ら	小	ら	珠
変	起	の	た	う	た	小	に
化	る	前	り	と	中	た	甚
と	べ	進	と	男	の	晩	た
東	と	珠	自	ふ	び	年	く
亜	初	に	覚	。	蓋	の	字
の	物	政	し	而	し	境	と
形	質	海	つ	し	絶	に	高
勢	上	大	、	て	筆	在	小
に	に	乱	も	心	に	て	語
対	精	の	尚	か	近	自	を
し	神	餘	ほ	其	い	ら	
	上						







国立国会図書館 山縣有朋伝記編纂資料(写本) 15